

農業と福祉の連携が築く お互いに高め合う関係



仁成ファーム佐藤昌芳さん(中列左から1番目)、
音羽協働センターの梅野豊さん(後列左から1番目)とセンター利用者のみなさん

厳しい人手不足が
きっかけ

鉦路市の仁成ファームでは5年ほど前から、福祉事業所に作業の一部を委託している。そのきっかけとなったのは「圧倒的な人手不足でした」と佐藤昌芳常務が話す。「経営方針として牧場の規模拡大を目指し、3年後の搾乳頭数をイメージしながら増頭と近隣牧場の買い取りを進めていきました。しかし、なかなか人手を確保できなかったんです」

「週一回、短時間勤務もOK」という条件で求人を試みるも、反応は今ひとつ。そんな時、たまたま新聞で「農福連携」の記事を読んだ佐藤さんは、藁にもすがる思いで市役所の福祉課へ。そこで紹介されたのが、牧場作業と障がい者をつなぐ活動を模索していた梅野豊さんだった。ひと通り仁成ファームの作業を見学した梅野さんは「これなら何とかできそうです」と頷いたという。

経営の成長につながる 農福連携

佐藤さんと梅野さんは、一年の歳月をかけて障がい者が作業しやすい体制をつくり上げていった。例えば、牛舎内の清掃を1日3回から1回に集約したり、ミルクパーラーでの搾乳作業を3工程から5工程に分解し、単純な作業の繰り返しとした(左図参照)。また、専用の道具に目印をつける、注意点を貼り紙にするなどの業務改善を実施。

Aさんは、「背が低い自分のために、作業しやすいよう踏み台を用意してくれるなどの心配りが嬉しいです。毎日、楽しく搾乳しています」と笑顔で語ってくれた。農福連携をスタートさせて5年。福祉のノウハウを活かした働きやすい職場づくりが労働災害を防止、牧場の生産性向上につながり、農業経営を成長させている。現在は障がい者が担当する仕事の幅も広がり、子牛の哺育補助をこなす方もいるという。



ミルクパーラーとは、牛を集めて搾乳を行う専用の施設のこと



ミルクパーラーの牛が入るブースを清掃の様子

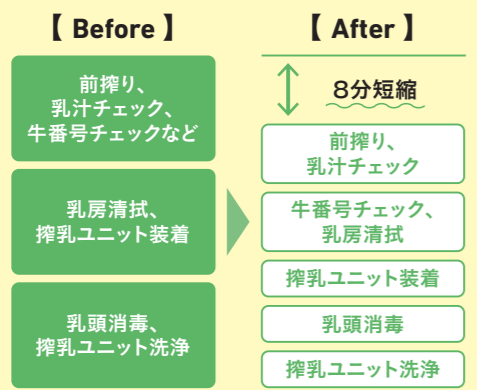


新人スタッフには仕事を見せながら丁寧に伝える

みんなが働きやすくなった！ 3つの工夫

1 作業を分解

当初は3工程だったミルクパーラーの作業を、5工程に分解。5つの作業をそれぞれ1人が担当する。集中力が切れないよう、約1時間ごとに担当作業を交代する工夫も。



2 道具には目印を

道具にテープ等で目印をつけ、牧場所のものや福祉事業所所有のものとを区別し個数を管理。必要な時に道具がないということが起きないようにしている。



3 注意点は張り紙で

注意点は口頭ではなく、張り紙にした。誰もがいつでも確認できるよう、ルールが見える化したことで些細なミスが減った。

